様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　７日現在

機関番号：３１３０４
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５９２５２７
研究課題名（和文）　母親の子育てを支援する祖母のいきいきライフを促進する教育プログラムの実践
研究課題名（英文）　Practice of a nursing intervention program to promote child care support for grandmothers in the three generation families
研究代表者
三澤　寿美（MISAWA SUMI）
東北福祉大学・健康科学部・教授
研究者番号：10325946

研究成果の概要（和文）：三世代同居家族で子育てする母親を支援する祖母の子育て支援を促進する教育プログラムの効果を検討した．はじめて子どもをもつ母親と子育て支援者となる同居の祖母を対象とし，介入群は 11 組，対照群は 17 組であった．産後 6 か月の介入群の母親の肯定的・積極的母性意識は対照群の母親より有意に高く，否定的・消極的母性意識は有意に低かった．祖母の教育プログラムへの参加は，母親の肯定的・積極的母性意識を向上させ，否定的・消極的母性意識を低下させる可能性が示唆された．

研究成果の概要（英文）：We examined the effect of the nursing intervention program to promote child care support for grandmother in the three generation families. The subjects were 11 pairs in the intervention group, and 17 pairs in the control group. As the results of the multiple regression analysis in the six months after birth, the scores of high aggressive maternal consciousness and low negative maternal consciousness were significantly influenced by the grandmothers' participation to the educational program. The results of this study suggested that the participation to the nursing intervention program of the grandmothers will improve aggressive maternal consciousness and reduce negative maternal consciousness of the mothers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：看護学，母性・女性看護学，祖母，子育て支援

１．研究開始当初の背景

わが国の出産・子育てに関する支援は，親の母親，すなわち祖母が中心となって提供されている（国立社会保障・人口問題研究所，2008）．宮中（2005）は，実母や義母の子育て支援がまだ多く行われており，祖母の豊富な子育て経験を活かした祖母の孫への養育的かかわりは，私的子育て支援として，特に乳児期や早期幼児期においては重要であるとしている．すなわち，核家族化が進んだ現代においても祖母は母親の子育てにとって，重要な存在であるといえる．しかしながら一

方では，三世代同居家族において子育てする母親と家族の間において，育児方針の違いから葛藤を抱えている場合もある（佐々木ら，2001）．子育て支援に関する研究は 1992 年頃から，年を追うごとに増加しており，それぞれの研究においては，しばしば夫や夫以外の家族の支援や家族関係の重要性が指摘され，課題が述べられている（富岡ら，2005）．夫以外の家族，特に支援を期待されている祖母に対する看護援助の必要性がいわれているが，妊婦を介して妊婦と家族との関係性に働きかけることはされてはいるものの，子育て支援の観点から家族，特に祖母に直接働きかける具体的な看護援助は検討されていない．筆者らは，祖母の孫世代育児に影響する要因（遠藤ら，2003），母親の母性発達課題と母親役割獲得に影響する要因（三澤ら，2004），家族の問題における祖母世代と母親世代の関係（三澤ら，2008），三世代同居家族における子育て支援ニーズと支援内容について検討してきた．これらの検討から，祖母の存在やはたらきかけ，祖母の考え方や価値観が母親の子育てやその後の家族関係に影響を及ぼすことが明らかになった．さらに，母親の子育てを支援する祖母が役割達成感や満足感を得て，祖母自身が QOL を維持しながら子育て支援を行うためには，祖母に対する継続した教育が必要であり，単なる支援者としてではなく祖母自身も幸福感を感じるような看護介入が必要であると考えた．

２．研究の目的

子育て支援者として期待されている祖母に対して，祖母の子育て支援の促進と，祖母自身の健康増進ならびに役割受容や QOL 向上をめざした教育プログラムを実践し，その効果について検討する．

３．研究の方法

（１）研究デザイン

教育プログラムの介入群と，対照群を設定した縦断的準実験研究とした．

（２）対象者

対象者は，三世代同居家族において乳児を子育て中の母親を支援している義母または実母と，支援を受けている母親である．介入群の祖母には妊娠後期から産後 3 か月まで開発した教育プログラムを継続して実施する．教育プログラムに参加した介入群（祖母と母親の 20 組程度）と教育プログラム用のパンフレット配布のみを受けた対照群（祖母と母親の 20 組程度）である．

（３）データ収集

母親の妊娠後期から産後 6 か月まで継続してデータを収集する．祖母のサポート提供の状況，役割受容，自己肯定感，主観的 QOL と，サポート提供を受ける母親の母親としての母親意識の観点から教育プログラムの効果を検討する．使用尺度は，祖母は役割受容尺度（三川，1990），自己肯定感尺度(樋口ら，2002)，生活満足感尺度Ｋ（古谷野ら，1990），母親は母性意識尺度（大日向，1988）である．母親の産後 6 か月に，インタビューにより介入群の祖母の子育て支援に対する考えや思い，祖母としての役割受容，役割達成，役割満足，生活満足，幸福感を補足データとして収集した．

（４）データ分析

介入群と対照群の 2 群間で，時期，祖母の職業の有無，祖母と母親との関係による祖母のサポート状況，祖母の役割受容，自己肯定感，主観的 QOL，母親の母性意識についてノンパラメトリックな統計手法により比較した．また，教育プログラム参加の影響について産後 6 か月の母親の母性意識を教育プログラムの効果として重回帰分析により検討した.統計処理は,統計解析プログラム IBM SPSS Statistics ver19.0 for Windows を用い，有意水準は 5%とした．

（５）祖母の子育て支援と QOL を促進する教育プログラム

介入群に実施する教育プログラムの特徴では，母親の身体的・心理社会的変化や子どもの成長発達に応じたその時期の課題や問題の解決のための知識・情報の提供，子育てに必要な技術体験，また母親の孤独な子育てと同様に子育てを支援する祖母もまた孤独な子育て支援となることがないように問題や課題の分かち合い，情報の伝達，模倣，感情の表出と受容，受容と理解，対人学習などのグループの効果（Yalom，1991）を期待して祖母のグループディスカッションを妊娠後期，産後 1 か月，産後 3 か月に行う．

（６）倫理的配慮

本研究は大阪府立大学看護学部研究倫理委員会の承認を受けて実施した．研究協力施設および研究協力者に対して研究の意義，目的，方法，研究協力の自由意思，匿名性の確保とプライバシーへの配慮等について文書を用いて説明し，承諾書への署名により研究の同意を得た．

４．研究成果

（１）研究協力施設と対象者

A 県内にある設置主体が同一の周産期医療施設 2 施設において，データ収集ならびに教育プログラムを実施した．2 施設とも対照群のデータ収集を行った後に，介入群のデータ収集および教育プログラムを実施した．

祖母と母親を 1 組とし，妊娠後期から産後 6 か月まで継続して協力した介入群は 11 組，対照群は 17 組であった．

介入群の祖母の平均年齢は 59.1±7.3 歳で，義母 6 人（54.5%），実母 5 人（45.5%），就業

している祖母 7 人（63.6%），専業主婦 4 人（36.4%）であった．母親の平均年齢は 30.7±5.0 歳であった．対照群の祖母の平均年齢は 57.7±7.3 歳で，義母 9 人（52.9%），実母 8 人(47.1%),就業している祖母 13 人(76.5%)，専業主婦 4 人（23.5%）であった．母親の平均年齢は 29.8±6.3 歳であった．いずれにも両群間で有意差はなかった．

（２）祖母のサポート提供の頻度

両群間で祖母の母親への手段的サポート，情緒的サポート，評価的サポート，情報的サポート，代弁的サポートの頻度に有意差はなかった．

介入群において祖母の手段的サポートの頻度と母親の肯定的・積極的母性意識は，産後 6 か月が産後 1 か月，産後 3 か月よりも有意に高かった．また，産後 1 か月の無職の祖母の手段的サポートの頻度は有職の祖母よりも有意に高かったが，義母と実母の祖母のサポートの頻度の増加に関係していなかった．

（３）祖母の役割受容，自己肯定感，主観的 QOL

介入群の祖母の役割受容，自己肯定感，主観的 QOL に変化はなかったが，産後 6 か月では，祖母の役割受容が高ければ主観的 QOL が有意に高く，祖母の役割有能感が高ければ母親の肯定的・積極的母性意識が有意に高かった．また，有意な差はなかったものの，手段的サポートの頻度が高くなった産後 6 か月において，介入群祖母の自己肯定感や主観的幸福感は対照群祖母の自己肯定感や主観的幸福感よりも高く推移する傾向であった．

（４）母親の母性意識

介入群の母親では，母親の肯定的・積極的母性意識は，産後 6 か月のほうが産後 1 か月と産後 3 か月よりも高くなっていた．対照群の母親では，母性意識に変化はなかった．また，母親の肯定的・積極的母性意識は介入群が有意に高く，否定的・消極的母性意識は介入群が有意に低く，両群間で差が認められた．

（５）祖母が教育プログラムに参加する影響

祖母が教育プログラムに参加する影響を重回帰分析により検討したところ，産後 6 か月の母親の肯定的・積極的母性意識は介入群の母親が対照群の母親より有意に高く，否定的・消極的母性意識は有意に低かった．すなわち，介入プログラムへ参加した祖母からサポートを受けている母親の方が，参加していない祖母からサポートを受けている母親よりも，産後 6 か月の肯定的・積極的母性意識が高く，否定的・消極的母性意識が低いことが明らかとなった．

（６）教育プログラムに参加した祖母の子育て支援の体験

教育プログラムに参加した祖母の実際の子育て支援では，できるだけ手出し口出しをしないように母親の子育てを手伝っていた．また，母親や父親に手伝う際には，我慢や忍耐といった祖母自身の気持ちや行動をコントロールしたり，制限したりすることに努めており，このような祖母自身の態度や行動を母親が親として成長していくために必要な祖母の役割であると祖母自身が理解し，受容していた．また，祖母は，現在の自己を肯定し，近い将来の自己の目標につなげていた．特に，母親とのより良好な関係への変化を認識し，孫と過ごす時間や生活に満足するとともに幸福感を感じており，このような機会を得ることができたことや機会を与えてくれた母親に感謝していた．このことから，教育プログラムに参加した祖母は，自己の存在や祖母としての役割を肯定的に受容して，母親の母親役割を獲得する過程を支える祖母の役割として，実際に行動することを通して幸福感を感じていた．また，祖母は現在の自己を肯定的に受容するだけでなく，健康増進を目的とした行動を選択したり，新しいことに挑戦することも行っていた．母親の子育てをサポートする祖母は未来の自己を想像しながら目標や希望をもち，これからの生活に生きがいを見いだしていた．

（７）看護実践への示唆

以上の結果より，祖母の教育プログラムへの参加は，産後 6 か月の母親の肯定的・積極的母性意識を向上させ，否定的・消極的母性意識を低下させる可能性が示唆された．

教育プログラムへの参加は，祖母の母親へのサポートの直接的な増加にはつながっていなかったが，祖母の子育て支援を促進する教育プログラムは，同居する祖母が母親の選択や意思決定をサポートすることを重視していたため，祖母は子育てを行う母親の子育ての状況を考慮し，祖母の母親へのサポートのあり方や態度を考えた行動につながったと考える．そのため母親は日常的な生活のなかで，祖母から支持され，見守られ，尊重されていると感じながら子育てをすることができたため，母親としての肯定感や自信をもてるようになり，母性意識の向上につながったと推測する．さらに，祖母がサポートを継続していくためには，祖母の役割満足感や幸福感に関連する情緒的サポート，情報的サポート，評価的サポートができているという認識をもてるようなアプローチが必要であると考える．

祖母による子育て支援という次世代を担う母親とその子どもとのかかわりは，対象喪失に伴う葛藤や衰退への不安といった課題（岡本，1999）が伴う更年期ならびに老年期にある女性にとって，次世代への貢献を認識することにつながる貴重な経験になると考

える．さらに女性は，生涯にわたって他者との関係や交流の影響を受けて発達する存在であり，母性継承期の役割をもつ祖母世代の子育て支援に，本教育プログラムを通じて看護専門職として関与することは，女性の生涯を通じた健康と家族の健康に寄与する可能性があると考える．

（８）研究の限界と今後の課題

本研究では，サポートの効果を子育て開始から６か月間のみで評価したが，子育ては子どもが自立するまでの長期間に及ぶことから，今後は祖母の役割受容と母性意識を子どもの成長発達段階の時期ごとに評価しながら，継続的な教育プログラムを実施する必要がある．また，祖母のサポート状況，役割受容，主観的 QOL ならびに母親の母性意識について具体的に把握でき，より簡便に評価できる評価指標の検討が必要であると考える．同時に，更年期から老年期にある祖母の身体的負担と健康増進に関する評価も加え，祖母の身体的，心理的，社会的健康を総合的に評価する指標についても検討が必要であると考える．

教育プログラムの実施と活用については，祖母が参加しやすい場所や時間を設定するなどの企画を検討するほか，現在実施されている女性外来，更年期・老年期にある女性を対象とした健康教室，母親学級・両親学級の内容に本プログラムの内容を追加する，またはプログラムで使用した資料を配布するなどの実現性・実用性を考慮することが重要である．

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）

Sumi Misawa, Michiko Machiura, Kazumi Nakayama； The role of the grandmother ～ Child-rearing assistance from grandmothers that supports the process of becoming a mother～, 29th Triennial ICM Congress, 2011.6.23, Durban, South Africa.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

三澤　寿美　（MISAWA SUMI）

研究者番号：10325946

(2)研究分担者

町浦　美智子　（MACHIURA MICHIKO）

研究者番号：70135739

中山　和美　（MAKAYAMA KAZUMI）

研究者番号：50300059

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：